

揖保川水運の繁栄



修復された出石の船着場

揖保川は歴史的に重要な交通路で、流れが緩やかな所では古代から船が使われていました。中世には、官衙や寺院用の大きな用材が上流から運ばれました。鎌倉時代後期以降、三方や三方西（波賀町）などからの木材に関する文書が多くなります。延文五年（一三六〇）には書写山円教寺の心柱が引原から伐り出されていますが、その経緯を記した『摺拾集』から、谷川を堰き止めて木材を流したことや、通常は網干まで数日かかったことが知られます。木材や筏なら越えられる浅瀬でも船には危険です。そのような所も次第

に開かれ、中世末までには香山村（たつの市新宮町）まで船が遡るようになりました。しかし、上流に比地保キの難所があつて、ここが開削されたのは江戸時代初めの元和年間（一六二〇年前後）のことです。これによって網干から出石までの通船が実現します。その結果、出石は揖保川舟運のターミナルになりました。兩岸に船着場の石出しが築かれ、下流の村々からも船が集まり、船問屋の倉庫が並んで、活気あふれる商業地へと発展します。井関の關係で運航は秋の彼岸から春の彼岸までの半年間ながら、山崎藩の『万覚帳』には「出石高瀬舟三十二艘」（天保二年＝一八三一）、「正月から春の彼岸までに荷を積んだ」船数千七百三拾七艘（安政二年＝一八五五）などがあります。上流からの筏もここで再編成されました。水運は藩の貴重な財源となり、出石には藩の船番所や浜御殿が建てられました。

当時の川船、いわゆる高瀬舟は長さ七間・幅一間・深さ二尺程度が一般的でした。下り船では米や木炭などが、上りには塩や日用雑貨などが運ばれましたが、積荷の量は川の状態によっても違い、米なら十石から二十石前後だったようです。乗り組みは三人が基本で、上りは二人が兩岸から綱で引き、一人が船を操りました。農閑期の稼ぎになったとはいえ、危険の伴う重労働でした。なお、幕末には上流の村々から出石以北への通船願が提出されましたが、実現しませんでした。



修復後の船着場石出し

編集後記

あけましておめでとうございます。皆さんは新年をどのように迎えられましたか？ 美味しいお正月料理をたくさん食べられましたか？お正月の食べ物といえば「おせち料理」や「お雑煮」、「お餅」などが思いうかびますが、最近「お餅」はいつでも食べることができるようになったためか、「お正月の食べ物」のイメージが薄くなってきたような気がします。でも、お正月に食べる「お餅」はなんだか特別な感じがして美味しく感じるのは私だけでしょうか？

さて、正月も終わり、これからは正月太りの解消をめざします。がんばります！

石

広報しろう 1月号

平成28年1月15日発行(130号)

発行／宍粟市 編集／企画総務部秘書広報課 〒671-2593 兵庫県宍粟市山崎町中広瀬 133-6

☎0790-63-3000(代) FAX 0790-63-3061(代) ✉info@city.shiso.lg.jp 🌐http://www.city.shiso.lg.jp



この広報紙は環境保護のため、植物油インキと古紙再生紙を使用しています。

Public Relations SHISO [2016.1]